

異分野にこそ、新しい発想のタネがある。人材マネジメントや経営学以外の学問、企業以外の人や組織を扱った本に、学びを探る。

「働かないアリ」を抱える意味は

筆者の長谷川英祐氏は、アリやハチといった社会性昆虫を研究する進化生物学者だ。ここでいう社会とは、「複数の独立した個体が相互作用する集団」のことで、「そうした社会を作るとみなせる生物は、昆虫を含めてたくさんいます」と長谷川氏は言う。

たとえばアリは、女王とワーカーから構成される複雑な社会を作るが、その社会がすべてメスだけでできている点は、ヒトの社会とはまったく異なる。「一方で、アリの社会でもヒトのそれと同様、社会のルールを破った者は罰せられます」。このように両者の社会で似たようなことが見られるのは、アリもヒトも「複数の個体が協力（相互作用）して生きている」からだ。だからこそ、生物の社会を見ていくことで、人の社会の本質をのぞき見ることができるかもしれない。本書の狙いもそこに置かれている。

たとえば、「働かないアリ」の存在からは、長期的視点と短期的視点のト

レードオフについて示唆が得られる。アリのコロニーでは、ある瞬間を取り出すと約7割のワーカーが働いていないし、長期的にも1～2割の個体はほとんど働かない。アリのコロニーは「常に働かない者」が一定程度存在するシステムを採用している。

なぜアリたちは、そういうシステムを採用しているのだろうか。長谷川氏は、「リスクに対する備え」だと説明する。アリがワーカーを増やすには、卵から育てるしかない。ヒトの企業のように、急に働き手が不足しても、ほかのコロニーから雇ってくるわけにはいかないのだ。一方でヒトの世界と同様、コロニーの危機はいつ襲ってくるかわからない。だから平常時は働かないアリを多数抱えることで、もしものときに備えているというわけだ。

繁閑に応じた労働力の増減が常識となっている現代企業からすると、アリのシステムはなんとも悠長に見えるかもしれない。だが、ここで忘れてはい

著者について



長谷川英祐氏

北海道大学大学院
農学研究院准教授

Hasegawa Eisuke_1961年東京都生まれ。進化生物学者。子どもの頃から昆虫学者を夢見る。民間企業に5年間勤務した後、東京都立大学（現首都大学東京）大学院で生態学を学ぶ。働かない働きアリの研究が注目されている。

けないのは何千万年、何億年にわたる進化の過程への長期的視点だ。

アリを含む生物たちは、他を圧倒する存在ではなく、何があっても滅びない存在を目指して進化している。勝つことより、長期にわたり負けないことが大事だともいえる。将来に伝わる遺伝子という生物学的な利益を確実に得るため、長年かけて到達したのが、常に働かない者が一定程度存在するシステムということなのだろう。「短期的視点で見ると効率的でも、長期的視点に立つとどんな非効率を生むことがあるのか。トレードオフに目を配る必要があります」と長谷川氏は言う。

アリの社会を観察することで、「繁閑に応じて労働力を増減させる」というヒトの企業の常識に、別の見方を投げかける。これは本書に登場するエピソードのごく一例で、このほかヒト以外の生物の、個体と集団の関係と、ヒトにおけるそれを比較してみたり、カエルの種多様性と寄生虫感染率の研究から、多様性と長期的存続の関係を論じたり、多彩な論者が展開される。ヒトの組織にかかわる人事のみならず、ぜひご一読をお薦めしたい。



『働くアリに幸せを』

著者／長谷川英祐
講談社 1365円（税込）
2013年9月刊行